

シニア世代による農業ボランティアへの参加意識 The senior generation's intention of participation to the agricultural volunteer

下平佳江¹ Yoshie SHIMODAIRA, 加藤麻樹² Macky KATO, 大橋信夫³ Nobuo OHASHI

Abstract: One of the farmer's problems in depopulated area is lack of human power to keep agriculture business. Agricultural volunteer is considered as one of the solutions of the problems in farm areas. The purpose of this study is investigation of introduction of farm volunteer by senior generation in town area. The result has shown that the senior generation in town areas is going to join the agriculture for some purposes. One is to exercise for their health. Others are getting fresh and safe foods, studying of agriculture, contribution for other people, stopping the increase of wasteland, and so on. In addition, the result has also shown that the volunteer's requirements are time, close places and transports. Some of the volunteers require some consideration to their labor. Thus the matching system of farmers and volunteers is needed to build the relation among them.

Key words: Agricultural volunteer, Senior generation, Matching of requirement,

1. 背景

農業人口の高齢化により、国内の食糧生産事情は深刻さを増している¹⁾。耕作放棄地の拡大や食料自給率の低下は、農業人口が大幅に増えない限り改善の兆しは望めない。現役の農家の中には、農業労働力の低下を機械化だけでは補えず、農業補助者を必要としている場合が多い。それは、傾斜地の耕作や収穫作業などでは機械化が困難な場合が多く、人手による作業が必要になるからである。多くの高齢者が自分の子供や兄弟姉妹の助けを借りながら農業を続けているが、彼らは農業後継者としては位置付けられていないことが多い。したがって高齢者が亡くなったあとは、農地は耕作者を得られず、荒廃地となっていく場合が多い²⁾。

では、どのようにして農業に継続性を持たせるか考えると、血縁者の支援だけには頼らない人的支援というものが必要となる。自治体やJAなども、農業の担い手確保のために、研修制度や里親制度を準備したり、季節性農作業へのお手伝いを募集しており、参加者が気軽に農業と関われる雰囲気ができると、参加希望者も増えてくると思われる。

一方、都市在住のシニア世代に視点をあててみる

と、田舎へ移住して農業をしたいと考えて実行している人の割合が高い³⁾ことから、農業に関わろうとする意識が他世代よりも積極的であると考えられる。

移住しないまでも、定年退職後の自身の健康管理や経済的事情を考慮して、市民菜園で野菜作りをして身体を動かしたり、自分で作った安全で新鮮な野菜を食べて健康的に暮らしたいと願う人が多い世代であるとも言える。

職業生活をリタイアした後に、農業に関心のあるシニア世代をボランティアとして参加を積極的に促すことは、過疎化が進む市町村として検討に値する。定期的なボランティアを確保するためには、農家個人の努力も必要であるし、市町村やJAなどが、組織的に誘致することも重要である。

それには、どんな農家がどのような農作業に人手を必要としているのか情報提供が大事であるし、都市在住のシニアが農業ボランティアとして農村を訪問しようと思うきっかけや目的は何なのかを明らかにすることも必要である。また、ボランティアを受け入れる農家についても、農業未経験者でよい場合もあるし、作業によっては経験者の来訪を望むことなど、作業適正を配慮する必要がある。さらに、個人の性格などの相性の適正も考えながら、双方に無理のない組み合わせを考えることができれば農業支援者という一面に友人という要素が加わる可能性もでてくるので、都市在住者と農村との継続的な繋がりも生み出されることになる。

所属

- 1 長野県短期大学生生活科学科生活環境専攻 (助手)
- 2 長野県短期大学生生活科学科生活環境専攻 (准教授)
- 3 財団法人労働科学研究所 (客員研究員)

2. 目的

中山間地域の農業における人手不足を補う手段として、都市在住のシニアによる農業ボランティアの導入の可否を検討する。ボランティア参加を希望する者には様々な年代の人がいると思われるが、学生によるボランティアの問題点は、授業スケジュールが優先されるため時間的な制約が多く、農家の作業スケジュールとの調整が難しいことである。したがって、農作業にあてる時間的余裕を持ち、自身の移動手段を持つシニア世代を援農者として位置づける方法について検討することは、人手不足に悩む中山間地域の農業活性化にも貢献することと思われる。

シニア世代が農作業に参加する場合の目的は実に多様であると考えられるので、農業ボランティアへの参加希望者の要望を明らかにすることは、継続的な援農者を確保するきっかけになると考えられる。また農業ボランティアに来てほしい農家と、参加希望者とのニーズのマッチングを図る必要もある。

本研究では、都市在住者による農作業支援体制作の構築のために、農業ボランティアを希望する都市在住のシニア世代と、慢性的な労働力不足に悩む農家のそれぞれの農業ボランティアに対する要望を明らかにし、人手不足に悩む過疎地域において、農作業支援体制に継続性を持たせるために必要な条件を明確にすることを目的とする。

3. 方法

農業ボランティアに関する希望調査を、都市在住のシニアと中山間地域の農家に対して実施した。

長野市の「ながのシニアライフアカデミー Nagano Senior Life Academy (以下 NaSLA)」受講者 40 名を対象に、「農業や農業ボランティアに関する質問紙調査」と題する調査票を用いて、調査を実施した。

また、長野市中条 (旧中条村) にて、これまでの農業関連の調査でも協力を得たことのある農家 8 軒を対象に、農業ボランティアの受け入れに関する希望を面接および質問紙にて調査した。ボランティアを必要としている農家からは、農作業の内容とスケジュールなどについて質問紙で回答を得た。それぞれの質問項目は以下の内容で構成されている。

NaSLA 受講者に対する質問項目は、(1) 回答者の属性、(2) 農作業経験、(3) 農業ボランティアへの参加意思、(4) 食料品の購入経路、(5) 農村のイメージ、などである。調査期間は 2010 年 9 月であ

る。質問紙の配布と回収は、NaSLA が開催される長野県短期大学において、直接配布と直接回収を同一日に実施した。

農家に対する質問項目は、(1) 回答者の属性、(2) 農業歴と農業規模、(3) 農作業支援者の状況、(4) 農業ボランティアの利用希望、(5) 生活全般に関する不便などである。調査期間は 2010 年 9 月である。質問紙は農家を訪問して直接配布を行い、郵送により回収した。

4. 結果

4-1. NaSLA 受講者の回答結果

(1) 回答者の属性

平成 22 年度の NaSLA 2 年生 40 名を対象にボランティアへの参加希望に関する質問紙調査を実施し、全員から回答を得た。男性は 63 歳から 81 歳までの 9 名で、平均年齢は 71.4 歳、女性は 60 歳から 81 歳までの 31 名で平均年齢は 67.8 歳である。(表 1)

職業の内訳は、無職と回答した人が 32 名で、技術・専門職が 2 名、事務職 1 名、農業 1 名、生産・労務職が 1 名、その他 3 名である。現住所は全員が長野市である。

表 1 NaSLA 受講者の属性

	NaSLA 受講者		現在の職業	
	人数	平均年齢	有職	無職
男性	9	71.4	3	6
女性	31	67.8	5	26
全体	40	68.7	8	32

(2) 農作業経験について、

自分または実家が農家であるのは 10 名で、非農家は 30 名である。自分が農家であると回答したのは 1 名のみで、りんごや梨の果樹栽培をしている。他の 9 名は実家が農家で、農作業の手伝いとして関わっている。自分または実家が農家である 10 名のうち、ボランティアが必要と思っているのは 8 名で、7 名は長野市および周辺地域に実家がある。(表 2)

自分または実家が農家である 10 名を除いた非農家 30 名のうち、これまでに農業体験がある人は 19 名、農業体験がない人は 11 名である。農業体験をした時期は、小中学校の頃から結婚するまでと回答した人が 10 名、現在も市民菜園や家庭菜園などで農作業をしている人が 9 名である。(表 3)

表2 農家の割合 (NaSLA)

農家	男性	女性	計	%
自家	1	0	1	2.5
実家	1	8	9	22.5
非農家	7	23	30	75.0
計	9	31	40	100.0

表3 非農家 30 名の農業体験 (NaSLA)

農業体験	男性	女性	計
ある	5	14	19
ない	2	9	11
計	7	23	30

子供の頃、あるいは現在も農作業に関わっている人の作業内容は、田植えや稲刈りなどの稲作が 10 名、あとの 9 名は野菜栽培などで、りんごの摘果などの果樹に関わる作業の経験者は稲作と重複する 2 名のみとなっている。

(3) 農作業ボランティアへの参加について

農業ボランティアへの参加希望を示したのは 20 名で、参加を希望しないのは 17 名、未回答は 3 名である。ボランティアへの参加希望のある 20 名の内訳は男性 7 名、女性 13 名であり、参加を希望しない 17 名の内訳は男性 2 名と女性 15 名である。

なお、農業ボランティア参加希望調査用紙の質問項目では、ボランティアを「したい」と「いつかしたい」を分けて聞いており、結果は「したい」が 8 人、「いつかしたい」が 12 人であった。結果の分析では、この 2 グループを一緒にして、農業ボランティアへの参加意思が「ある」グループとして扱う。

参加希望が「ある」20 名のうち、農業経験者は 14 名（うち 4 名は自分または実家が農家）、農業未経験者が 5 名、経験未回答者が 1 名である。

参加希望が「ない」17 名のうち、農業経験者は 11 名（うち 5 名は自分または実家が農家）、農業未経験者が 5 名、経験未回答者が 1 名である。

参加希望が未回答で「不明」の 3 名は、いずれも自分または実家が農家で、自身がボランティアを必要と回答しているので、他の農家を手伝う余裕はないという回答と受け取れるため、ボランティア参加の希望は「ない」グループとして扱って差し支えないと思われる。したがって、過去の農業経験が、現

在のボランティアへの参加意思に影響するかについては、経験者と未経験者が同じ割合であることから、今回の調査では、関連はないと言える。（表 4）

表4 ボランティア参加希望と農業経験 (NaSLA)

参加希望	人数	経験者	未経験	経験不明
ある	20	14	5	1
ない	17	11	5	1
不明	3	3	0	0
計	40	28	10	2

ボランティアへの参加希望者が関心を示す農作業は、野菜の収穫作業が 9 名で一番多く、次いで果樹の収穫が 6 名、何でも良いが同じく 6 名、野菜の種や苗の定植は 2 名となった。田植えや稲刈りなど稲作に関連する作業を希望する人はいなかった。

また、性別では、男性では「何でも」と回答した人が多いが、女性は野菜や果樹の収穫作業を選択する人が多いことが特徴である。（表 5）

表5 希望する農作業 (NaSLA)

（複数回答可）

	野菜 収穫	果樹 収穫	何でも	種・苗	田植え 稲刈り
男性	1	0	5	1	0
女性	8	6	1	1	0
計	9	6	6	2	0

農業ボランティアで参加するときのスタイルとしては、農家に任せるが 9 名、作業を選択したいが 4 名、観光と農作業をセットにするが 3 名であった。また、観光とのセットを選んだのは全員女性であった。（表 6）

表6 希望する参加スタイル (NaSLA)

	任せる	作業選択	観光セット
男性	3	2	0
女性	6	2	3
計	9	4	3

農業ボランティアで参加するときの報酬については、無報酬でよいと 6 名が回答したが、その内の 1

名は路線バスしか交通手段を持たないため、交通費が持ち出しにならないようにしたいという希望を持っている。時給や交通費の金額を具体的に示したのは1名、他の人は報酬を望む記述が見られなかった。

参加できる日時を記述した人は8名と少ないが、平日のみ参加が6名、土日のみ参加が1名、平日と土日のいつでも可能という人が1名であった。

参加できる時間を具体的に記述した人が3名いたが、あとはいつでも良い、あるいは自分の都合で自由にしたいという希望である。

参加目的は、農作業で身体を動かすと健康維持のためになるが5名、農業について勉強したいが4名、人の役に立ちたいが3名、新鮮な食べ物を手に入れたが3名、その他には、地産地消の活動として協力したいが1名であった。(表7)

表7 参加目的 (NaSLA)
(複数回答可)

	運動健康	農業修得	役に立つ	食物入手	他
男性	2	2	1	0	1
女性	3	2	2	3	0
計	5	4	3	3	1

参加するときの交通手段は、自家用車と回答したのは6名(男性1名、女性5名)で、路線バスが4名(男性1名、女性3名)である。自家用車を利用すると回答したのは男女とも60歳代で、バスを利用すると回答したのは自家用車を持たない60歳代の女性1名と70歳代の3名であり、この3名は、長野市の高齢者福祉課が70歳以上の高齢者に発行している「おでかけパスポート」を利用すると回答している。それにより市内の乗車は一回100円で利用できるの、通常バス料金(長野～中条間1000円)と比較して格安な料金で目的地までの移動が可能である。

(4) 食料品の購入経路について

普段の食品の購入方法は、スーパーを利用するのは35名で一番多く、生協などの宅配を利用しているのは4名、コンビニまたは個人商店を利用するのは各2名である。その他には、知人や自分の家庭菜園を利用したり、道の駅の産直販売を利用するという人もいる。(表8)

食品購入時の優先基準は、安全性が24名と一番多く、次いで価格が17名、店が近いなどの利便性

表8 食品の購入方法 (NaSLA)
(複数回答可)

	スーパー	コンビニ	商店	宅配	他
男性	9	0	0	0	0
女性	26	2	2	4	4
計	35	2	2	4	4

が13名という結果である。長野市の大学生48名を対象とした同様の調査⁴⁾と比較して、近くに店があることを重視する割合がとて高いのは、移動手段が容易ではない高齢者も多く含まれているからと考えられる。(表9)

表9 食品購入時の優先基準 (NaSLA と学生比較)
(複数回答可)

NaSLA	安全性	価格	利便性	賞味期限	他
男性	6	4	1	2	0
女性	18	13	12	4	1
計	24	17	13	6	1
(%)	(60.0)	(42.5)	(32.5)	(15.0)	(2.5)
学生 ⁴⁾	19	21	0	5	8
(%)	(39.6)	(43.8)	(0)	(10.4)	(16.7)

(5) 農村のイメージ

農村についてのイメージを自由記述で回答を求めたところ、計30名の回答が得られた。一番多いのは「高齢化がすすみ、農業は重労働・日焼け・腰痛などで大変」(11人)、「のどかでのんびりして人情味がある」(8人)、「農業は大変だが満足感が得られる」(3人)、「美しい田園風景を子孫に残してほしい」(3人)、その他(3人)という結果であった。

次に、過疎地域の活性化のために必要なことについて自由記述で回答を求めたところ20名が回答し、「若い人に関心を持ってもらい、農業への協力を得る」(10人)、「農業は楽しいというイメージ作りが大切」(3人)、「交通の利便性を高める」(2人)、「産直販売による都市住民とのコミュニケーション」(2人)、その他(3人)という結果であった。

今後の自分自身と農業との関わりについては、就農を希望する人は0名、家庭菜園程度はやってみたいという人が20名、農業をしてみようという気持

ちはない人が8名という結果であった。家庭菜園をしようと思っている20名のうち8名は現在も市民菜園や農作業の手伝いなどで農業に関わっている人達である。過去の農業体験の有無と将来農業に関わりたいという気持ちとは、今回の調査では関係が見られない。(表10)

表10 将来的な農業との関わり (NaSLA)

過去農業体験	就農希望	家庭菜園希望	希望なし	未回答	計
ある	0	13	5	3	21
ない	0	6	2	2	10
不明	0	1	1	7	9
計	0	20	8	12	40

4-2. 農家の回答結果

(1) 回答者の属性

長野市中条の農家8軒を対象に、ボランティアの受け入れに関する質問紙調査を実施し、農家8軒・12名(平均年齢67.8歳)から回答を得た。

回答者の属性は、表11に示すとおり、女性は7名で、40歳代1名、50歳代1名、60歳代2名、70歳代1名、80歳代が2名で、平均年齢は68.8歳である。男性は5名で、40歳代1名、50歳代1名、70歳代2名、80歳代1名で、平均年齢は66.8歳である。販売農家は6軒で、そのうち2軒は有機栽培・無農薬栽培をしている。

表11 対象農家の属性 (中条)

	40代	50代	60代	70代	80代	合計
男性	1*	1*	0	2	1	5
女性	1*	1*	2	1	2	7
全体	2*	2*	2	3	3	12

*：有機栽培・無農薬栽培農家

(2) 農業歴と農業規模

回答者のうち2軒は30・50代で有機栽培・無農薬栽培に転職した販売農家で、農業歴は平均9年である。他の4軒は棚田オーナー制度を導入したり、果樹を主とする販売農家で、農業歴は平均28.4年である。一方、80歳代の女性2人は配偶者が亡くなったあと一人で販売農業をしてきて、徐々に農業規模を縮小し、現在は自家用農家である。

耕作面積の平均は248.5aで、販売農家の平均耕

作面積は281.3a、自家用農家の平均耕作面積は25aである。販売農家のうち4軒は、自分の農地だけでなく、この地域の荒地を増やしたくないとの気持ちもあり、耕作放棄されそうになる田畑を人から借り受けて栽培している。しかし、この人達自身も農業後継者の確保には苦勞しており、現在頑張っている自分達のあとは、この地域の農業はどうなるかと心配をしている。

(3) 農作業支援者の状況

日常的に農作業を支援する人の有無について調査したところ、8軒の全農家で支援者を確保していた。

具体的には、2軒の無農薬栽培農家のうち1軒は、農業研修生を受入れており、年間を通して支援者を確保している。もう1軒も収穫・出荷作業など農作業全般に渡って支援を頼める知人を確保している。無農薬栽培では、通常の栽培手順に比べて手間を多く必要とするからである。

果樹栽培農家では、りんごの摘花、袋掛け、摘果作業などを親戚や兄弟が手伝っているが、特に収穫作業では経験者でないと頼めない作業内容もあるとのことである。他の高齢農家では田植えや稲刈りなどの作業や機械を使う作業を兄弟や子供らが支援している。その他、2名の高齢女性は、昔の仕事仲間に草刈り作業を依頼したり、中条で6年前にできた「生活支援グループ、中ちゃん」を利用して、自分では無理な傾斜地の草刈り作業を依頼している。

(4) 農業ボランティアの利用について

これまでに農業ボランティアを利用したことがあるのは4軒で、今後、ボランティアを利用する希望があるのは7軒である。

中山間地域の特徴として、傾斜地の農場が多いことから、大型農業機械の使用が難しく、小型機械による作業か、もしくは手作業が主になる。そのため、人手は慢性的に不足しており、「来てくれれば、仕事は何でもある」という農家もある。しかし、多忙を極める農家では、あまり農業のことを知らない人よりは、多少経験したことのある人なら来て欲しいと思っている。

ボランティアにして欲しい作業としては、草取りを挙げたのが6軒で、他には、稲刈りのはぜ掛け・脱穀作業、ジャガ芋掘り、玉ねぎの収穫、りんごの摘花、山林の手入れを挙げている。草取り以外は、いずれも短期間に作業が集中する作業が多く、自身の子供や兄弟親戚を応援に頼んでいるが、それ以上に人手を必要としている農家である。中には、「遠

足気分で来てもらって、めずらしいキビの収穫作業を体験させてあげたい」というように、農作業の依頼というよりも都市住民への機会提供や交流を目的としている例もある。

ボランティアへの報酬については、ボランティアを希望する7軒の農家のうち5軒が、無報酬を希望している。草刈りなどのように作業によっては賃金を払うことも考えている農家も1軒ある。交通費の支給を考えた農家は2軒で、1000～2000円の金額を提示している。なお、無報酬を希望する農家は、昼食を付けたり、採れたての野菜などをお土産として提供すると回答した人もいる。

また、見知らぬ人に来て貰うこと自体を躊躇する女性高齢者もあり、女性の一人暮らし世帯などの場合は、ボランティアの派遣元が自治体や地域の団体などであれば安心感が得られると思われる。

(5) 農業や生活の中での不便

地域の高齢者で、棚田を守るために始めた「棚田オーナー制度」は、都市在住者からの人気は依然として高く、オーナーの数は維持しているが、受け入れ農家の高齢化で管理が大変になり、いつまで続けるかが議論になっている。地域の高齢者だけの維持管理は限度があるため、手伝ってくれる世代の登場を期待している。

高齢になるにしたがって、脚力が弱くなり、買い物や通院などの移動に不便を感じている高齢者が多い。70歳以上限定の「おでかけパスポート」もバスの便のよい地域に住んでいると利用可能であるが、80歳代後半になってくるとバスに乗ること自体も困難になる人もいる。20km先の病院へ通院するために、40kmも離れて住んでいる妹夫婦が自家用車で送迎をしているという例もある。

5. 考察

5-1. 参加希望者と農家とのマッチング

これまでの長野市中条（旧中条村）を対象とした調査では、農作業体験に参加する学生や子供たちと、彼らを受け入れる農家との双方の意識を明らかにしてきた。その結果、学生や子供たちによる農作業体験は、農業や田舎に関心を持つ若い世代を育てることにはかなり貢献しているが、大学の授業スケジュールとの調整が必要であったり、交通手段を持たない学生も多いことから、農家が期待する即戦力としては位置づけが難しいことが分かってきた⁵⁾。

子供を対象にした農業体験は、食の大切さや農業

の役割を教えるという教育活動の一環であり⁶⁾、その効果は世代を跨いで現れるものであろう。農家が必要とする農業労働力は、今提供できる時間があるシニア世代に期待するのが現実的であると思われる。

図1は農家と農業体験希望者との希望をマッチングする時に考えられる項目であるが⁵⁾、ボランティア参加者の場合も報酬が存在しないこと以外は、ほぼこれに準ずると考えて良いと思われる。

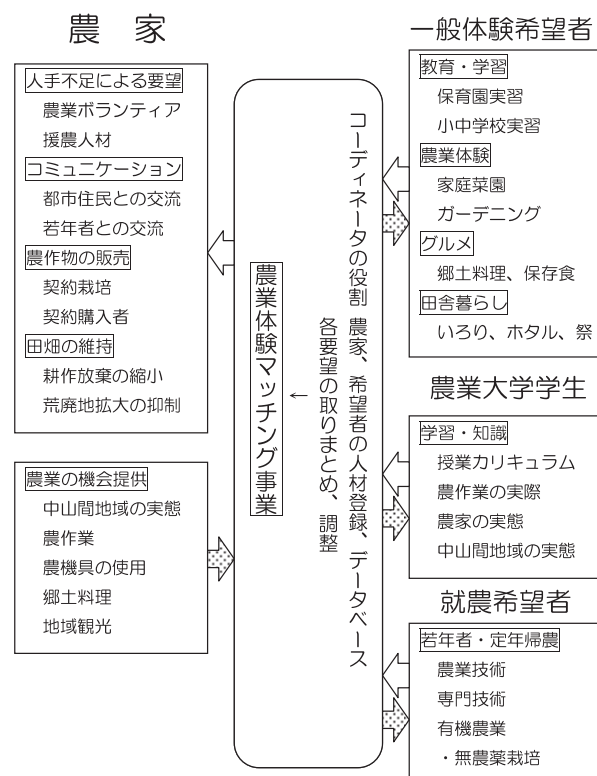


図1 農業体験に関するコーディネータの役割⁵⁾

シニア世代によるボランティア参加に限定して考えた場合、日程や交通手段などのように物理的な希望への対応は容易であるが、多様な参加目的意識や相手の人柄との相性などのように、十分な配慮が必要な項目もある。したがって、事前に個々の希望調査を行なうことで、ある程度の対応は可能であるし、一度参加した人が次も参加したくなるような組み合わせを提供できるようにすることが望ましい。

(1) 日程のマッチング

農業ボランティアへの参加希望者のうち日程を記入したのは8名のみで、平日希望が6名、土日のみが1名、平日土日の両方が1名だった。（表12）

作業の時間については、いつでもよいとする人は1名、10～17時が1名、自分の都合で参加が2名、半日が2名である。一日を希望する人が少ないが、

表 12 参加希望日程 (NaSLA)

	平日のみ	土日のみ	両方可能
男性	1	0	1
女性	5	1	0
計	6	1	1

労働時間を短めに設定することによって、農業体験のないシニアの参加が得られやすくなるとともに、体力的に無理をしないほうがリピーターの確保に繋がり易い。自家用車で 30 分程度の距離ならば、半日参加も可能である。

農家では、農繁期の手伝いを求めており、栽培作物や作業によって忙しい時期は異なる。農作業は天候に左右されるため、予定通りに進まないこともあり、平日でも都合をつけて来られる援農者を確保したい気持ちがある。また、これまで県外中学生の農業体験や、農工大生の農業実習を受入れてきている農家は、宿泊も可能である。

農工大の学生の調査結果⁵⁾でも「参加する前は、農家の人と打ち解けられるかかなり不安があった」という例もあるので、最初は日帰り参加をして、農家の人との相談や都合で、次回からの日程を決めていくのが良いと思われる。

(2) 報酬のマッチング

ボランティアは無報酬が原則であるので、この質問項目は矛盾を含んでいるが、参加者の意識としては、労働力を提供するだけでなく、美味しい食事や交通費を心配して貰えると更に嬉しいという気持ちがあると考え、敢えて質問した。

シニアの回答者の中には、自分または実家が農家の人が 10 名おり、そのうち、ボランティアに来て欲しいと思う人が 8 人いた。来て貰う場合の報酬については、具体的に時給などを提示した人が 3 人いて、作業によって異なることもあるだろうが、時給 700～800 円を賃金として考えている。ただし自分がボランティアに行く場合は、はっきり報酬について記述した人は 1 名だけだった。調査を依頼する際に行なった説明も、調査用紙にも農業ボランティアに関する調査ということで行なっているのので、回答者もボランティア＝無報酬を当然と思って回答した人が多かったのだと思われる。

一方、ボランティアを受入れる農家の報酬についての考えは、現在も有償で作業を依頼している高齢者は、同程度の金額までは出してもよいと思ってい

るが、できればなるべくお金をかけたくない、かけられないと思っている農家の方が多い。ボランティアで参加する人の農作業経験なども分からないという前提で訊いているので、農業に関心のある人が農村に来て、野菜の収穫作業を手伝ってくれると有難いし、家で採れる野菜やお米を使った美味しいお昼を食べて貰いたいという気持ちは、参加者の希望ともよく合っている。

(3) 交通の利便性のマッチング

農業ボランティア参加希望者の交通手段は、例えば長野駅から中条までの場合、自家用車または路線バスを利用することになる。県道を通過する路線バスは、平日は朝 8 時～20 時半までの間に 11 本、土日は 8 時～19 時半の間に 8 本運行されている。長野発 8 時の次は 10 時近くになるので、やや不便を伴うが、中条に着いてからはさらに不便で、県道より山際の農家へ移動する際には長野市営バスに乗換えて目的地に行く必要がある。

このように、交通事情が都市部とは大きく異なるので、路線バス利用者には県道周辺農家を紹介しないと移動だけでも大変である。自家用車のある農家なら、県道付近まで送迎をすることは可能であるが、80 才代で運転をしない女性宅に行くには、市営バスも通っていない集落にあるため、自家用車以外に交通手段は無い。

バス料金については、通常は長野一中条間の往復で 2000 円かかるので、「手伝いに来てくれた人に交通費くらいは出さないといけないのだろうが、通常はバス料金は高く払えない」と思う農家もある。

バス利用の参加者は 70 歳以上なら、行き先を「おでかけパスポート」が使える地域にすることで、双方に負担の少ない組み合わせが実現できる。

(4) 作業の選択性

参加者が希望する農作業は、表 5 のように、何でもよいと答える人もいるが、野菜や果樹の収穫を希望する人が多い。しかし、田植えや稲刈り作業を希望する人は一人もいなかったことから、稲作は体力的にきついイメージが持たれているのではないかと考えられる。過去に稲作の手伝いをした人も大勢いるが、暑い時期で体力的にも辛いし、姿勢としても疲れる仕事であるという印象を持っている。

前年度の調査でも、表 13 に示すとおり大学生が希望する作業内容としては、野菜や果樹の収穫が多く、田植えや脱穀を希望する人は極めて少なかった⁵⁾。

表 13 希望する農作業（学生）⁵⁾
（複数回答可）

農業体験	要求度	野菜収穫	果樹収穫	何でも	播種定植	田植脱穀	他
経験者	積極的	4	6	3	3	2	1
	いつか	6	6	3	0	0	2
未経験者	積極的	2	1	1	3	0	0
	いつか	1	0	1	1	1	1
計		13	13	8	7	3	4

一方、農家が考える農業体験メニューとして、まず挙げられるのが田植えと稲刈りであるが、これらは農業ボランティアとして行く側にとっては望んでいない作業なので、棚田オーナーとしての作業参加以外の場合は、他の作業メニューを用意しておく必要がある。

シニア世代は体力的に不安を持つ人が多いので、慣れない農作業をする際には、まずは時間が短く姿勢も楽な作業から入るのが良いと思われる。また、作業によっては、農業をしたことがない初心者には任せられない作業がある。草取りや草刈りは農作業の中で多大な時間と労力を必要とする作業であるが、農家が日常的に使用する刈払い機は、操作手順や注意を払うべき事柄を知らない初心者は使ってはならない危険な機械である。謝った操作は自分だけでなく他人も傷つけることになる。また農業機械類の操作方法は家電製品と異なり、複雑な手順を踏んでいかないとスタートできないものが多く、万が一事故に至った場合の補償問題まで発展する可能性がある。ので、使わせたくないと思う農家も多い。

りんごの収穫作業を希望するシニアが多かったが、販売農家の場合は、収穫には経験者に来てほしいと思っている。果実に傷をつけると売り物にならないので細心の注意が必要であり、経験者以外にはさせたくないという気持があるからである。自家用の場合は、経験者でなくても収穫作業を受入れている農家もある。今回の参加希望者の中には、りんご農家の手伝いを経験した人が2名いたので、近隣市街地からボランティアを得ると、農作業経験の有無も重要なマッチング要素となってくることが分かる。

春先の摘花や秋の葉摘みは、初心者でもできる作業なので、作業によって選択性が出てくることを理解しておけば、農家と参加者のマッチングを計画するときの参考になる。

（5）参加目的のマッチング

シニアの参加目的は、表7に見られるように、健康のために身体を動かしたい、新鮮で安全な食べ物を手に入れたい、農業の方法について勉強をしたい、人の役に立ちたい、というように多様化している。

受け入れ農家の方も、有機農業の研修生を教えている人や、無農薬栽培で安全な米や野菜を栽培している人もいるし、めずらしい雑穀の収穫に遠足気分であって欲しいと思っている人もいるなど、こちらも多様化している。中には、棚田のオーナーとしてもいいし管理者としての関わりでもいいので、地域では不足する人材パワーを求める農家もある。

参加希望者にとっては農業に関する情報や経験が少ないので、マッチングする農家を紹介することで、ボランティア活動が始動する。参加を重ねるごとに目的意識も変わることが考えられるので、農村に顕在する地域ネットワークを利用して、参加者自身が目的を達成する方法を見つけるよう期待したい。

（6）相性のマッチング

参加希望者と農家との相性については、質問紙調査では回答が難しいことが予想されたので、質問項目には入れていない。農家との面談の際に、会話の中から感じ取られた事柄を記述してみたい。

農業ボランティアを受け入れる農家にとって、作業の手伝いは有り難いが、家で食事を提供したり、会話も発生することから、プライベートなことも他人に知られることになるので、来てくれる人の人柄とか居住地などを気にする例もある。同じ地域の住民より、都市部の人の方が気軽に話ができるという理由である。

農作業によっては、外にいて短時間で住む作業もあるが、一日がかりの作業の場合は屋内での滞在も出てくるので、人間関係の距離の近さによって農作業を選択するようにすれば農家の負担感も少ないと思われる。

5-2. 農業ボランティア確保のための課題

（1）農業はキツイというイメージを払拭

ボランティアにいくことを躊躇するシニアの理由で多いのが、「年だから体力的にムリ」というものである。60代でも足腰の調子がよくない人は「自分には農作業はできない」と思っている。

一方、全国の農業従事者の平均年齢は65.8歳で、中山間地域では70代～80代の高齢者が現役で農業を営んでおり、彼らから見れば「60代はまだまだ若い」となる。農作業の中には体力的に辛い作業も

あるが、軽度な作業もあるので、ムリをせずに参加できる内容で誘致してボランティア希望者数を増やすことは可能である。

一度参加すれば、農業はキツイというイメージだけではないことが分かり、その後の継続性を持たせるのは難しいことではない。

(2) 農家のボランティア受入れ体制作り

人手不足に悩む農家にとって、必要な作業の依頼はそのほとんどが有償で行なわれてきた。村内で農業機械を動かせる人を見つけて畑を耕運機で起こしてもらえれば高齢者でも野菜の苗を植える作業はできる。しかし、水田の機械作業をすべて人に委託していたら高額な請負料で収支が赤字になることは多くの人の知ることである。したがって自分で機械を動かすか、動かせなくなったら農業を縮小して、いずれ辞めるとというのが、多くの高齢者農業の辿る道であるといえる。

今回の調査対象である高齢者農家では全員が農業に協力してくれる兄弟姉妹か子供か知人のいずれかを持っていた。言い換えれば、その人達の協力なしでは農業を続けていけないということである。

作業の内容は、特殊技能が必要なりんごの収穫や草刈り以外は、野菜の収穫や稲刈りや脱穀など、いわゆる「誰にでもできる」作業が多いので、農業経験のない人でも作業に参加することは可能である。

農業ボランティアへの待遇については、多くの農家が無報酬を前提に考えているが、継続的な援農者をボランティアに求めるのであれば、有償ボランティアとして条件を明示することも必要である。

有償か無償かは当事者間の相談で決めることもよいし、農家とボランティアで行った人の相性なども、その後の継続的な付き合いに影響する。

5-3. 農業ボランティア確保のための提案

(1) 農業の楽しみの発見

小さな苗を植えた後に短期間で成長する葉物野菜や、土中から掘り出す根菜類などは収穫の楽しみを味わえる。また、普段はスーパーで食材を買うときは、植物の実の部分しか見ていないのであるが、農園に来ると、例えばゴーヤが葡萄のように棚からぶら下がっている光景を目にすることができる。ひとつずつ食べごろを見極めて収穫した野菜は、最後まで大事に食べきろうという気持ちになるのではないだろうか。

これまでの調査で農業ボランティアに参加した学生は、農作業の後に農家から提供される食事に魅了

され、このご馳走を食べることが次回への参加に繋がった。自家製の野菜や昔ながらの味噌を使った料理は、普段都市で暮らす学生には新鮮な味の体験だった。本来の野菜の味に敏感なシニア世代にとっては、郷愁を感じることでできるこれらの食べ物の味は非常に魅力あるものと思われる。中条にある道の駅では大勢の都市住民が、地元で採れた本物の味の野菜を買い求めている。

(2) 農業ボランティアへの気軽な参加

初対面の農家へ行くのは、大人でも緊張が伴うイベントであり、事前の情報提供があると不安も薄れると思われる。行き先や作業内容を選びたい参加者もいるし、観光と農作業をセットにしたら行きやすいという女性も3名いた。中条でも、野沢菜採りツアーや梅採りツアーなどは近隣市街地からの参加者を得てこれまでも盛況であった。半日は農作業、半日は観光とすると、女性シニアの体力にも対応した参加スタイルを提供することができる。

農業ボランティアは、初めての土地を訪れて運動(農作業)とおいしい料理を楽しめる小旅行と思うことで気持ちが向かいやすくなるといえる。また希望によっては、農家に宿泊することも可能であるので、宿泊費や交通費の負担をあまり感ぜずに参加することができるというメリットもある。

昨年、学生の農作業体験を受入れた農家では、「若者」との交流を楽しみにして、農業と向き合っている生活していることで得られた感動や農村に残っている美しい自然や人情などを、若い人に伝えたいという思いを持っていた。相手が自分の年齢と近いシニア世代であれば、このような感動や人情を理解しあえる可能性が広がるのではないと思われる。

都市在住者は農家との交流を通して農業や農村の魅力に触れることができ、「農」を暮らしに取り入れたり、「農」を人生に取り込むことも可能になる⁷⁾。無農薬の野菜や地元の新鮮な食材が容易に入手できる農村や、美しい空気とのどかな田園風景に魅力を感じる都市在住者は多い。

6. まとめ

過疎化と高齢化の進む中山間地域では、農業の人手不足を補うために、都市在住者による農業ボランティアを積極的に受け入れる必要がある。それには、日程、報酬、交通の利便性、作業の選択性、参加目的のマッチング作業を行なうことが望ましい。システム化された形で人の交流が始められるようなデー

タ・ベースの構築が必要であり、農家と参加者の相性のマッチングについては、農作業を通して変容していくことも想定されるので、当事者間のなりゆきに任せてもよいと思われる。

質問紙調査の結果からは、対象者の半数が農業ボランティアへの参加意志を示していることから、市街地に住むシニア世代は、耕作放棄地が拡大しているのを他人事とは感じておらず、できることがあればお手伝いしたいという気持ちを持っている人が多いことが判明した。ただし、現在の自分の健康状態や抱えている仕事や家庭の状況によって、気持ちはあっても参加はできないと感じている人も多い。

本調査は、農業ボランティアへの参加を主目的として尋ねているので、このような結果が現れたが、都市と農村との交流を主目的としたイベントであれば、シニア世代にとって比較的楽な気持ちで参加できるとと思われる。

農村には都市にはない生活があり、それが都市在住者にとっての魅力となっているのは事実である。自家製の食材でつくる料理の味や、山の急斜面に広がる棚田に日本の原風景を思い描き、質問紙の回答



図2 山の傾斜地に作られた水田（稲刈り）

にもみられた「のどかな田園風景を子孫の代まで残したい」と思い願うシニア世代との交流が盛んになることで、農村が活性化する可能性は出てくる。

農地が荒れていくのを見るのは辛いので、自分にはできることはして農業を手伝いたい、人の役に立ちたい、という気持ちをもっているシニア世代の協力や好意は、ボランティアの活動の原動力となるものであるし、そういう気持ちを持つ人々が都市に大勢いることを知ること、また農村の高齢者も元気を取り戻すであろう。

謝辞

本研究は平成21年度文部科学省科学研究費による。記して感謝の意を示す。また調査にあたっては長野市中条（旧中条村）の農家の皆様、NaSLA受講者の皆様の協力を頂いたことにも感謝の意を記す。

参考文献

- 1) 農林水産省 食料・農業・農村白書 平成19年版、2007
- 2) 下平佳江、農業労働、産業・組織心理学ハンドブック、392-395、丸善、2009
- 3) 相川良彦他、農村をめざす人々—ライフスタイルの転換と田舎暮らし—、筑波書房、2006
- 4) 下平佳江、加藤麻樹、過疎地域の農業や高齢者に関する都市在住者と地域在住者の心象の違い、長野県短期大学紀要、第63号、45-52、2008
- 5) 下平佳江、加藤麻樹、農業体験実習に参加する大学生と受入れ農家のニーズの違い、長野県短期大学紀要、第64号、61-70、2009
- 6) 中村麻里、農業体験への「まなざし」と食育の制度化、村落社会研究ジャーナル、No.28、38-49、2008
- 7) 星野紀代子他、泥だらけのスローライフ—自分さがしの農の旅—、実業之日本社、2003